

巖山

ハ一 巖し寒さに雪化粧して
刻む皺こそ凛々しき姿
不意に恋しく誉れに思う
今は遠くの巖山

無骨だと言われようとも
媚は売れない不器用さ故に
尖る岩肌、雨風そのまま
受けて泣く

ハ一 何は無くとも御前を見据え
想い馳せるは師と仰ぐ昔
あの世この世に逃げ隠れせず
今は心に巖山

点滅する街の月星
会いにゆかねば会えない緑
自然、不自然、昼夜を問わずに
成せば成る

ハ一 誰が知るやらお国の山を
誰に言うやら胸の言霊
忘れた頃に誇りに思う
二度と拝まぬ巖山

側にありゃ有り難さ無し
人の勝手は形を変えて
いつの間にやら巖のようにと
風を切る